



Title	歴史教育における異文化理解 : アイヌ民族の歴史と文化の実践から
Author(s)	深澤, 智成
Citation	学校教育学会誌, 18: 25-36
Issue Date	2013-03
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/6923">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/6923</a>
Rights	

歴史教育における異文化理解  
—アイヌ民族の歴史と文化の実践から—

Intercultural Understanding in History Education  
—From the Practice of Ainu History and Culture—

深澤智成  
FUKAZAWA Tomonari

北海道教育大学附属函館中学校  
Hakodate Junior High School Attached to The Faculty Education,  
Hokkaido University of Education

北海道教育大学函館学校教育学会

# 歴史教育における異文化理解 —アイヌ民族の歴史と文化の実践から—

Intercultural Understanding in History Education  
—From the Practice of Ainu History and Culture—

深澤 智成  
FUKAZAWA Tomonari

北海道教育大学附属函館中学校  
Hakodate Junior High School Attached to The Faculty Education,  
Hokkaido University of Education

## 論文概要

グローバル化が進む現代社会において、異文化と接触する機会が増えている。こうした中、異文化理解が叫ばれて久しい。しかし、ここでいう異文化とは、大抵、諸外国を対象とした異文化であって、内なる異文化、例えばアイヌ文化を対象にすることは少ない。これまでアイヌ文化を取り上げる際、教科書外であることなどが問題としてあり、敬遠されやすい状況にあるといわれてきた。これらを踏まえ、実践モデルを考え整理し、ここに提示したものである。

キーワード：異文化理解 地域 アイヌ民族 アイヌ史 アイヌ文化 歴史教育

## 1. はじめに

グローバル化が進んだ現代社会において、諸外国の人と接する機会がひと昔前に比べ、比較にならないほど増加している。例えば、街中の旅行者であったり、職場の同僚であったり、地域住民であったりと、外国人は遠い存在ではなくなっている。

このような中、こうした外国の人との接点を大切にしようと、外国語のブームが起こったことは記憶に新しい。駅前留学をはじめ、各種語学教室など、外国語の取得が昨今では必須の能力になりつつある。

これと並行して、海外諸国の文化や習慣に目を向けようとする動きもある。この動きが、学校教育の中でも取り入れられて、世界史重視や国際理解教育、さらには異文化理解教育と、様々な教育の潮流が生まれてきた。

筆者は以前、中国からの大学院留学生と連携して、異文化理解の教育実践を試みたことがある。

この時、教材研究をしながら感じたことに、「異文化＝海外の文化」がある。すなわち、異文化理解教育で取り上げる異文化とは、海外の文化であるという事である。

そもそも、異文化とは「自分達とは異なる文化」のことであるから、決して海外のことだけにとどまらないのではないだろうか。

例えば、日本国内には47都道府県があり、それぞれの地域には、独特の地域性がある。また、アイヌ文化もあれば、琉球文化もある。日本国内にも、多様な文化が存在している。つまり、日本国内にも異文化は存在しているのである。自分たちが所属している文化圏とは異なる文化圏、すなわち「異文化」を題材に、教育実践をしてもよいはずであろう。

しかし、異文化理解教育で取り上げる題材の多くは、大抵の場合、外国の文化を異文化と呼び、自国内にある異文化には目もくれないことが多い。日本国内にも、個性あふれる独自性を持った異文化が、多数存在しているのにも関わらずである。

こうした「日本国内における異文化」について、実際にどれほどの人が関心を向けているのだろうか。実際問題、意識調査を試みないと結果は出ないのであるが、一つの尺度に都道府県の文化を取り扱った番組が人気を博している。これは、「日本国内の異文化」への興味に他ならないのではないか。

けれども、これが教育の現場でとなると、様々な問題がある。その代表的な問題が、こうした日本国内における異文化を、教育現場で教材として取り上げ実践するということが行われにくいという点である。この理由に、内容が専門的であること、時間数的な問題があること、さらには受験に不必要といったことがあげられる。

このような状況のせいで、昨今叫ばれている異文化理解を目指す教育を行うにあたり、学校現場では、国内の異文化には目を向けることができないような礎が築かれてしまっている。

だが、21世紀に入り、文化というファクターが、益々その重要性を増してきているのは事実であろう。なぜなら、政治や経済と並ぶ大きな切り口として、社会を捉えるための物差しとして見られるからである。すなわち、異文化理解の重要性がここにはある。

青木保は、異文化を異文化と感ずるとき、「それまで身近に親しんできた文化とは違う空間を隔てた地理的にも異なる場所にある文化」に接した時であるというが、これは何も海外であることのみを指してはいない。

とりわけ異文化を理解することは、これからの社会では、より重要になってくる。その理由に、社会の変化があげられる。この社会の変化についていくためには、相応の能力を備えなければならない。これは、佐藤郡衛によれば「異文化を理解することと共生していく資質や能力の育成・個人としての自己の確立・表現力等のコミュニケーション能力」であり、異文化理解教育で育成したい力である。

異文化を理解することは、平和な時代を築くためにも、必要不可欠なことであることはいままでもないだろう。また、異文化を理解することで、これからの時代、異文化との共生も可能になってくる。この「共生」について堀尾輝久は、「相互の理解と尊敬、異質なものへの寛容の精神が不可欠」

だという。

今後、ますます進展するであろう国際社会、さらに大きく言えば地球社会は、宇土泰寛によると「多文化共生の社会」であるといい、これには「教師自らが多様性の受容、地球益・人類益を求める普遍的原理の実現をめざして生きること」が重要な課題になるという。

そこで筆者は、日本国内にある異文化を取り上げ、異文化を理解する授業を実践することにした。とりわけ、地域史の重要性を筆者なりに考えたこともあり、筆者が住み、勤務先の中学校もある北海道の独特の文化でもある「アイヌ文化」を教材にすることにした。

なお、実践を行うに当たり、筆者はもとより、実践を行ったクラスにも、アイヌ民族のご家庭はいないので、アイヌ文化を「異文化」と呼ぶことをご容赦願いたい。

また、にわか勉強のため、説明が不十分ではない箇所もあるかもしれないが、道外出身の筆者にとっては、できる範囲でおこなった実践である。今後の教育実践や授業力向上のためにも、ご指導願えれば、幸いである。

## 2. 社会科教育における北海道史の位置

授業実践の報告に入る前に、まず中学校の社会科教育における北海道史の取り上げ方について、整理しておきたい。

中学校社会科における北海道史について、取り上げられる内容やそれらに関する記述は、国家体制のあった地域（奈良や京都など）と比べると、比較にならないほど少ない。まして、アイヌ民族の歴史や文化のそれとなると、さらに分量は少なくなる。

とりわけ、アイヌ民族や歴史に関する内容的にも問題がないとはいえない。なぜなら、「コシャマインの戦い」や「シャクシャインの戦い」がコラム程度に取り上げられているぐらいだからである。北海道の中学校において、比較的使用されている教科書の記述がそれである。

これでは、北海道で学ぶ子どもたちは、北海道の歴史やアイヌ民族の歴史・文化を、あまり知らないままに、中学校社会科を終えることになってしまう。また、このような「戦い」のみを取り上げ、その背景の一つでもある和人の行為を取り上げないような内容では、アイヌ民族自体をあまりよく思わないようになるといえよう。

確かに、大学入試およびセンター試験を頂点とする現在の試験制度では、試験科目および内容に沿った授業展開が望ましく、それ以外の教科書範囲でないところは敬遠されても、仕方がないのかもしれない。

しかし、人が地域を作り、地域が人を作ってきたというあゆみを踏まえるならば、その地域のことを学ぶ必要がある。すなわち、北海道に住む人間にとって、北海道の歴史は学ぶべきである。北海道の歴史を学ぶことは、異文化理解にもつながる。なぜなら、異なった文化が共生した時代があったからである。こうした異なった文化が共生していた歴史に目を向け、現代を眺めることにより、これからの異文化との共生を、より充実したものにできると考えられるからである。

こうした異文化理解の題材として、「北海道」とくに「アイヌ文化」を取り上げることは、北の

地域に住むものとしては、できる限り行いたいものである。しかしながら、先にも触れたように「受験内容外」や「教師の力量不足」といった問題があることは否めない。

けれども、一時間でも行うのと行わないのでは、生徒の北海道という「地域」に対する愛着や認識が異なってくる。一般的な日本史の流れの中や、ひとつの時代の切れ目などに、ぜひ行いたいものである。

### 3. アイヌ民族の取り上げ方

近年、北海道大学においてアイヌ民族研究の拠点が設置され、盛んになってきたアイヌ民族研究であるが、その緒に就いたばかりであるといえよう。このアイヌ民族研究については、榎森進が「アイヌ民族を取り巻く現状を正しく見据え」ることを説いている。

とくに榎森進は、「アイヌ民族は全国に居住している」という点を強調している。2008年に北海道の先住民族として、日本政府が認めたこともあり、アイヌ民族は北海道だけで生活していると捉えがちである。しかし、実際には日本全国に居住している。ここから、道外でも扱うべき内容であるともいえようか。

そして、榎森進氏は次のようにも述べている。いわく、「狩猟・採集を生業とした自給自足の社会」との認識は、必ずしも正しいとは言えないという。これは、中学校社会科の内容で陥りやすい点でもあろう。

また、これからはアイヌ民族を、北海道の中だけではなく「北東アジアの中のアイヌ民族」という視野で見るとべきだという。グローバル化が進んだ現代社会において、養いたい広い視野や能力にもつながる。

こうした、アイヌ民族およびアイヌ史を扱おうとするとき、難点があることは否めない。まず問題としてぶつかるのが「専門的」であることである。とくに、アイヌ民族は文字を持たなかったといわれるため、その歴史を紐解こうとすると、どうしても専門書を見なければならなくなる。現在の学校現場では、そういう知識を増やすための時間は限られるため、敬遠され実践されにくい。

また、アイヌ民族の歴史を紐解くとき、中学校の歴史的分野では、おもに明治期に登場することが多い。これは、明治政府による開拓移住政策や同化政策などによるアイヌ民族への強制などがあったからでもあろう。しかし、榎森氏はアイヌ近現代史が少ないと警鐘を鳴らす。それは、アイヌ民族からの視点の欠如である。

なぜ、アイヌ民族を取り上げるかについては、意見が分かれるところであろう。この回答として、筆者は次のことを考えている。それは、「北海道開拓史観」からの脱却である。

北海道の歴史は、明治二年の開拓使設置をもって始まるとする意見もあるが、これはそもそも「和人中心の歴史観」に他ならない。北海道にはなにも和人しかいないことはなく、先住民族としてアイヌ民族が居住していたのである。

今後、アイヌ民族に関する研究成果の蓄積によって、アイヌ民族史やアイヌ民族の文化などを教材とした多様な教育活動およびその充実が期待できるのではないだろうか。

#### 4. アイヌ民族の歴史と文化の教育実践

ここでは、実際にアイヌ民族・アイヌ民族史・アイヌ文化を教材に、筆者が実践した授業の流れを紹介する。使用したおもな教材は、自作プリントとパワーポイントである。ちなみに授業タイトルは、「北海道の歴史—おもにアイヌ民族・文化を中心に—」である（スライド①）。

まず、「北海道の歴史はいつからか」という発問を行った（スライド②）。これを手始めとして、クイズ形式で北海道に関する問題を出していった。ちなみに答えは選択式にして、挙手で答えさせた。北海道の中学生とは言え、解答に対しては自信なく、まばらに手があがった。

厳密に北海道の歴史というとき、明治に入ってからが、北海道の歴史のはじまりといえる。それ以前は、蝦夷地の歴史といえよう。しかし、地名が変わっただけであり、北海道の歴史には変わらないのである。

次に、「和人が住む前の北海道は？」という発問を行った（スライド③）。これには、和人が住む以前には、北海道の歴史はないのかという意味を含ませた。おおよそ、小学校時代で「アイヌ民族」について学習している生徒は、「アイヌ民族が生活していた」と答えていた。

こののち、アイヌ民族に関するものを紹介していった（スライド④）。アイヌ民族やその文化の中から、身近に残るアイヌ語地名を取り上げ、より身近に感じてもらう工夫を行った（スライド⑤）。そして、アイヌ語地名を取り上げたのち、アイヌ民族の「衣・食・住」に関する写真などの資料を提示した（スライド⑥・⑦・⑧）。地域の博物館や資料館に行ったことがある生徒からは、反応があったものの、あまりなじみのないものが提示されたためか、反応はさまざまであった。

その他には、アイヌ文化の精神面やアイヌ文化振興法、さらには資料を提示してアイヌ民族差別の現実を目の当たりさせた（スライド⑨・⑩）。とくに、アイヌ民族差別のところでは、北海道大学にあるアイヌ民族研究センターが行った2008年の調査結果を用いて、生徒に身近な教育の差別を取り上げた。具体的には、アイヌ民族の就学率である。

最後に、21世紀に入り、グローバル化が進む中で、外国の文化を理解しようという声を聞くが、まず身近な文化・体感できる文化であるアイヌ文化に目を向けてみてはどうかと呼びかけた（スライド⑪）。その理由は、身近な事象であることに他ならない。

異文化理解は、何も外国の文化のみが対象ではなく、国内にも異文化は存在する。それらに目を向けるのも、悪いはずはないのではないだろうか。そのなかでも、とくに北海道に住む生徒へは「アイヌ文化」が最適の教材といえるだろう。

#### 5. 生徒の感想からみた実践の考察

前項でみたように、アイヌ民族の歴史や文化を教材にとりあげた実践の後、内容などに関して、自由に感想を生徒に記入させた。そこには、様々な反応が見受けられた。このため、生徒の感想をいくつか取り上げ、アイヌ民族の歴史や文化を題材にした実践について、筆者なりに考察してみたい。

まず特筆すべき点として、生徒の感想から、自分たちの住んでいる北海道の歴史を知る機会（授業）で、良かったという声が多かったことである。例えば、「北海道に住んでいるのにあまり北海

道の歴史を知らなかった。この授業を受けて少し北海道のことを知ることができて良かった」や「自分の住んでいる北海道の歴史を知ることができて良かった」などがある。

生徒の反応や感想から見ても、北海道に住んでいるとはいえ、北海道の歴史や文化、さらにはアイヌ民族のことを学ぶ機会はあまりなかったのであろう。断片的な知識を持つてはいても、語句のみであったり、イメージであったりと、体系立てて学んだことは無いようであった。このことは、アイヌ文化を教材として取り上げることの有用性を示している。

とくにアイヌ文化を教材にした有用性の象徴的な感想が、アイヌ語に関しての感想である。とりわけ、アイヌ語地名が印象に残った生徒が多くいた。例えば、「アイヌの言葉は身近なところにあることを知り、驚きました」や「今までしゃべっていた地名がアイヌ語だったことを初めて知った」、「意外にも身近でアイヌ語が使われていてびっくりした」など、多数の感想が見受けられた。こうした感想がでるといことは、そもそもアイヌ文化を小学校で習わなかったことに他ならない。

その他のアイヌ文化に関しても、興味関心が湧いたのか、自分自身で調べてみると言った声も見受けられた。例えば、「自分でも図書館などで調べ、もっとたくさんを知りたい」や「自分たちの住んでいる北海道をもっともっと知りたいと感じました」など、一時間の授業内容であったが、生徒への話題提供・問題関心・興味喚起といった点では、成功だったといえよう。

とりわけ、生徒にとって衝撃的だったのが、アイヌ民族差別のところであったようで、「アイヌの人々が苦勞している」など、自分たちが知らなかった点や驚いた点にも、関心がいつている。例えば、「根強く差別が残っていること」をとりあげたり、「日本人はとて歴史からみてもこころが優しくおもしろいがある人々と思っていたが、この授業を経て日本人もアイヌを差別していたのかと思うとむなしくなってきました」や「日本に差別があるなんて知らなかった」、「アイヌ民族が、自分が思っているほど人数が多くて差別がいまだに続いていたりして学校や仕事につけないこともあるんだなと思いました」などの感想があったりと、調査報告書の具体的な事例を用いて紹介した分、実際に起きているという実感が湧いていたようである。ただ、小学校で差別問題を扱っていなかったことに、筆者も驚かされたものである。

しかし、こうした内容も含めた全般的な今回の「アイヌ民族の歴史と文化」の授業実践に関して、生徒の感想を見ると、実施する価値の高い内容であったことが見て取れた。例えば、「ちゃんとした授業でやる内容と違うものを勉強することができ、世界観が広がった。アイヌという身近な存在を再確認することができた」や「普段勉強しないアイヌ文化のことも学べてよかった」、「北海道民としてしらないといけないアイヌ民族のことだったのでとてもためになる」、さらには「教科書にもあまり載っていないことを知ることができてよかった」などである。

実際に、生徒自身も「アイヌ民族の歴史や文化」に関しては、教科書外であるという認識がある点はいなめない。しかしながら、それを取り上げることで、教科書によらない学習が可能となっている。すなわち、現実社会の学習へと認識が変わっているといえようか。例えば、ある生徒は次のように感想を述べている。すなわち、「私たちが住んでいる北海道について知るいい機会でした。これからもいろいろなことを学び、考え、正しく公平な目で、アイヌのことなどの問題を考えてい



けるいいチャンス」として、本時があったという。

最後に、「北海道のこれから」に言及するような感想も見受けられた。例えば、「アイヌの文化を伝える義務はアイヌ民族だけではなく北海道に住んでいる私たちにもあるのだと思いました。そのためにまず、アイヌの文化に興味を持つことが大切だと思いました」と、アイヌ文化伝承についての感想や、「自分の土地の歴史を知ることは、これからの発展を考えること」という地域づくりに考えが及んだ生徒、また「アイヌの勉強は北海道に住んでいるならやるべきだ」と学習面に関する意見、さらには「アイヌの人々への差別がなくなっていないことがよくわかったので、私たちができることはごくわずかですが、身近なところからそのようなところをなくしていきたい」という共生社会に向けた歩みを考えるなど、わずか一時間の取組の中で、生徒にとっては様々なことを考える機会となったことは、生徒の感想を見ると明らかである。このことは、アイヌ民族の歴史や文化を、学校現場で積極的に題材とすべきであるともいえよう。このとき、従来の「戦い」・「自給自足」・「狩猟・漁労の民」という和人中心史観を、生徒のみならず教員も脱却することが、不可欠である。

多文化共生が目指されている現代社会においては、多角的な視野でもって物事を考える力を付けさせたい。この「考える力」の育成が、本時の根本、すなわち異文化理解教育にあると考える。そのため、従来の教科書中心の日本史ではなく、様々な日本史を取り上げるべきであろう。例えば、川島啓一氏のいう「3つの日本史」である。ここでいう北海道史は、いわゆるアイヌ民族史でもある。

アイヌ民族の歴史と文化を取り上げ、社会科の授業の中で「異文化理解」を目的することは、決して筋違いではなく、むしろ「遠くの異文化」より「身近な異文化」という点で、生徒への実感が異なっていると考えられる。教科書上の話ではなく、例えば「アイヌ語地名」など普段から知っているものが身近にある点が、より実践の結果を強固なものにしてくれる。異文化理解の一環として、内なる異文化に目を向けることが、推進されることが望ましいと筆者は考える。

## 6. おわりに―共生社会を目指して

本稿において、異文化理解教育の実践例として「アイヌ民族の歴史と文化」を教材にして筆者が行った授業をもとに、検討してきた。

はじめに、従来の異文化理解教育における「異文化＝外国の文化」という認識に関わる問題点を指摘し、国内の異文化を取り上げるべきであると確認した。

次に、従来の北海道史の教材化について、まず教科書の記述が少ない点を指摘した。そのあとで、アイヌ民族やその歴史・文化を教材化するときの問題点などを整理した。

そして、アイヌ民族の歴史や文化を教材にして、筆者が行った実践を報告した。授業後にとった生徒の感想から、本時の有用性を整理し、国内の異文化にも目を向けるべきだと指摘した。

結論的に言えば、「異文化＝外国の文化」ではなく、国内の異文化を題材にしてもよい点の本稿で確認できたのである。それ以上に、地域性も加味すれば、アイヌ民族の歴史や文化は、北海道ではぜひ取り上げるべきであるといえよう。授業実践の充実が望まれる。

なお、稿末には「二時間分の板書計画」・「パワーポイントのスライド例」・「指導案」を添付させ

ていただいた。それらを批判検討しながら、ぜひアイヌ民族の歴史や文化の教育実践を行ってみたい。

※本稿は、函館学校教育学会の2012年度年会において発表したものをもとに、加筆・修正したものである。

※本稿では、アイヌ民族を「異文化」としたが、筆者はもとより実践校においても「異文化」であるためである。

## 7. おもな引用文献・参考文献一覧

- ・青木保、『異文化理解』、岩波書店、2001.
- ・榎森進、「アイヌ民族の前近代史学習の要点」、歴史教育者協議会編、『歴史地理教育』増刊 No. 742, 2009年.
- ・榎森進「これからのアイヌ史研究に向けて」、北海道大学アイヌ・先住民研究センター編、『アイヌ研究の現在と未来』所収、北海道大学出版会、2010年.
- ・大津和子、『国際理解教育』、国土社、1992.
- ・川島啓一、「アイヌ文化から入る「北方史」の試み」、歴史教育者協議会編、『歴史地理教育』増刊 No. 742, 2009年.
- ・菊地達夫、「学校教育におけるアイヌ文化学習の実践とその意義」、『北方圏生活福祉研究所年報』第9巻、2003年.
- ・財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、『アイヌ民族：歴史と現在』、2008年.
- ・佐藤郡衛・林英和編、『国際理解教育の授業づくり』、教育出版、1998年.
- ・ジェームズ・A・バンクス、平沢安政訳『多文化教育』、サイマル出版会、1996年.
- ・鹿毛敏夫、「地域史教育の実践的構成」、全国社会科教育学会編『社会科研究』第46号、1997年、PP. 41-50.
- ・田端宏・桑原真人編、『アイヌ民族の歴史と文化』、山川出版社、2000年.
- ・日本国際理解教育学会編、『グローバル時代の国際理解教育』、明石書店、2010年.
- ・深澤智成「地域史教育論の構想」、佐々木馨教授退官記念委員会編『地域史と歴史教育』、北海道出版企画センター、2012年.
- ・深澤智成ほか「大学院留学生と連携した社会科授業実践とその考察」、北海道教育大学函館学校教育学会編『学校教育学会誌』第17号、平成24年3月.

## 社会科学習指導案

実施者 深澤 智成

○ 単元名 「北海道の歴史と文化」

○ 単元について

本単元は、地域性を取り入れた教材を用いた内容であって、特設で行った授業実践である。内容的には、江戸時代初期の鎖国体制の完成と4つの窓口についての授業を行った後、本単元の授業実践を試みた。その理由に、四つの窓口の一つに、蝦夷地松前およびアイヌ民族の話が出るからである。

本単元は2時間で構成し、はじめに蝦夷地の歴史の概略を整理した。ここではとくに、これまでに学習した「本州の時代区分」とあわせて学習することを心がけた。その理由に、この単元の内容を独立したものと認識してほしくなかったからである。

そして二時間目に、「アイヌ民族の歴史と文化」を題材に、前時で確認した蝦夷地の歴史（北海道の歴史）の流れをもとに、アイヌ民族の歴史を授業し、あわせてパワーポイントのスライドなどで、資料集にはない写真資料などを提示し、授業を構成した。

○ 単元目標

- (1) 北海道の歴史や文化を理解し、自らの住む地域について、調べてみようとする。
- (2) 身近な事例に着目し、地域の歴史や文化をより認識するようになる。
- (3) 北海道の地域性を理解し、北海道について考えるようになる。

○ 指導計画

学習内容	指導目標	時間
北海道の古代・中世	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北海道の原始から古代中世への流れを理解させる。</li> <li>・和人が北海道へ住むようになり、次第に定住するようになっていった過程を考察させる。</li> </ul>	1 / 2
アイヌ民族の歴史と文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイヌ民族の歴史や文化に目を向け、身近に存在することに気付せる。</li> <li>・アイヌ民族との共生の道を、歴史を考えながら行う事ができるようにさせる。</li> </ul>	1 / 2 (本時)

○ 本 時 案

1. 題 材 「アイヌ民族の歴史と文化」
2. 目 標 (1) アイヌ民族の歴史や文化に目を向け、身近に存在することに気付く。  
(2) アイヌ民族との共生の道を、歴史を考えながら行う事ができる。
3. 本時の展開

学 習 活 動	教師の働きかけ	指導上の留意点
	・スライドの準備	スライド①
北海道の歴史はいつからか		
・挙手で解答する。	・北海道の歴史について説明	スライド②
和人が住む前の北海道は？		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「アイヌ民族が生活」</li> <li>・スライドを見る</li> <li>・アイヌ語地名を、ヒントを頼りに考え、答える。</li> <li>・スライドを見る。</li> <li>・資料をもとに考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スライドや資料の提示</li> <li>・アイヌ語地名の紹介</li> <li>・アイヌ民族の衣</li> <li>・アイヌ民族の食</li> <li>・アイヌ民族の住</li> <li>・アイヌ文化の精神面</li> <li>・アイヌ文化振興法</li> <li>・アイヌ民族差別</li> <li>・身近なアイヌ文化について</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スライド③</li> <li>スライド④</li> <li>板書とスライド⑤</li> <li>スライド⑥</li> <li>スライド⑦</li> <li>スライド⑧</li> <li>スライド⑨</li> <li>スライド⑩</li> <li>資料の配布（アイヌ民族の就学率）</li> <li>スライド⑪</li> </ul>

○ 使用教材

- ・パワーポイント（稿末添付）
- ・プリント資料
- ・『グラフィックワイド歴史 北海道版』 とうほう

<資料2> 授業時使用スライド（一例・一部修正）

①

## 北海道の歴史と文化

—おもにアイヌ民族・文化を中心に—

②

### 北海道の歴史はいつからか

- ☒① 本州と一緒に
- ☒② アイヌ民族が住み始めたころから
- ☒③ 和人が道南に住み始めたころから
- ☒④ 松前藩ができたころから
- ☒⑤ 明治二(1869)年八月

☒正解は・・・③  
→記録では、1200年代初めに罪人が蝦夷が島へ送られたという。『吾妻鏡』

③

### 和人が住む前の北海道は？

人は住んでいなかった？

アイヌ民族が生活していた



蝦夷録を見たアイヌ民族の酋長(奥登別様)

④

### 先住民 アイヌ民族

- ☒現在およそ、2万5000人程。全国各地に。
- ☒言語は、アイヌ語。
- ☒※アイヌ語でアイヌとは、人間の意味。
- ☒身近なアイヌ語  
→北海道各地に残るアイヌ語地名。
- ☒北海道の大地で暮らしてきた。  
→自然や人との共生を大事に・・・
- 和人がつけいり、アイヌ民族から搾取する

⑤

### アイヌ語について

- ☒現在、アイヌ語を母語とする人は、ほぼ皆無。アイヌ民族であっても、アイヌ語を話す人は少数。
- 明治期の同化政策による日本語強制。

☒世界中にある言語の中でも、絶滅危惧言語といわれている。

☒身近なアイヌ語・・・  
アイヌ語地名。(北海道・東北)

⑥

### アイヌ民族 衣



⑦

### アイヌ民族 食



⑧

### アイヌ民族 住



⑨

### アイヌ民族 その他

- ☒あらゆるものに神様が宿ると考える(熊、鮭、家、火、大地・・・)
- ☒アイヌ文化振興法による伝統的文化的の保護  
→何が伝統かを和人が決める。その決められた文化を受け継がないといけない(文化を法律で保護すべきか)
- ☒困難を強いられながらも、普通に生活。
- ☒根強く残る民族差別(結婚・教育・就職)

⑩

### 北海道の歴史としてのアイヌ文化

☒2008年に、ようやく先住民として政府が認めたアイヌ民族。

☒彼らは、和人が移住する以前から、この北海道を中心に、北の世界で生活していた。

☒この彼らから、搾取し、暴力を働いたのは、他でもなく我々の祖先である。

⑪

### これからを生きる君たちへ

☒21世紀に入り、グローバル化が進む中で、外国の文化を理解しようという声を聞くが、まず身近な文化・体感できる文化であるアイヌ文化に目を向けてみてはどうでしょうか。

☒海の向こうの文化も大事かもしれませんが、身近に感じることでできる文化を理解してこそ、諸外国の文化への理解も進むのではないのでしょうか。

作成：深澤智成

## ＜北海道の歴史＞

○ 北海道の原始・古代

縄文 → 縄縄文 → 擦文／オホーツク → アイヌ文化  
(稲作が伝わらなかった)

※本州以南  
 縄文 → 弥生 → 古墳 ・ ・ ・ ・ ・

北海道には歴史がない…？

○ 北海道の先住民族

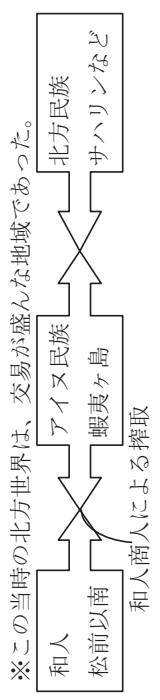
アイヌ民族 → 文字を持たない ⇒ アイヌ民族の歴史が不明  
 (2008年に政府が認める)

○ アイヌ文化

- ・ 神話や伝承が豊富 ← 文字がないアイヌ民族はどうやって伝えた？
- ・ 独自の精神文化
- ・ アイヌ文様
- ・ アイヌ語 … 北海道各地に残るアイヌ語地名  
(例： ～ナイ ～ベツ など)

○ 北海道史

- ・ 『吾妻鏡』にある1200年ごろの記述に  
 → 蝦夷ヶ島の登場 (罪人の流刑地として)
- ・ 15c頃、道南十二館の成立 (交易拠点)  
 → 函館には2つ (箱館・志海苔館)



- ・ 1457年、コシヤマインをリーダーにアイヌ民族の蜂起  
 → 武田信広の活躍
- ・ 1551年、蠣崎氏、アイヌ民族と和睦し、友好関係に。  
 ※この間、和人とアイヌ民族の対立が頻繁

- ・ 1593年、蠣崎慶広 (のちに松前と改姓)、  
 豊臣秀吉から蝦夷ヶ島島主に認められる
  - ・ 1604年、松前慶広、徳川家康に認められる  
 ⇒ 松前藩の成立
- 松前藩 (無石の大名)  
 松前城・和人地を支配 (熊石～松前～亀田)